

エッセイ

岡村郷司

(熊本県教育庁文化課長)

熊本地震以降、蒲島県政では「熊本復旧・復興四カ年戦略」を策定し、創造的復興に向けた各種取り組みをすすめているところです。

その主要施策の一つとして「くまもとの誇りの回復と宝の継承」を掲げており、熊本地震で被害を受けた文化財について、国や市町村と連携し、また民間寄付金を基にした文化財復旧復興基金を活用するなど、未指定文化財も含めた被災文化財の復旧を進めています。

併せて、熊本の宝としての価値、文化財保護の必要性を広め、次代への継承につながると思っています。

国内各地では、熊本地震の後も大きな災害が起きています。あのような経験は、二度と御免蒙りたいと思っ

いてなかった発見もあって
います。

被災文化財には、熊本城や阿蘇神社といった国指定の重要文化財をはじめ、町家や蔵など歴史的価値のある建造物や、被災した建物に保管されていた漆器・陶磁器などの民俗資料、甲冑、屏風・絵画などの美術工芸

歴史文化、文化財の力

品、掛軸や古文書といった動産文化財があります。この中からは、個人宅からレスキューされた甲冑が旧家臣が預かった藩主の武器・武具と合致するなど、今まであまり知られていなかった歴史を確認することにもつながっています。

また、各種復興事業に伴っ

て、場所によっては埋蔵文化財の発掘調査を行う必要があるのですが、例えば、

国道五十七号復旧ルートにおいて、江戸時代の街道であった豊後街道の一部「清正公道」の姿が、幅9m、逆台形の凹型構造で上水道も設置されていたことなどが確認されました。災害住宅建設においては、約一七〇〇年前のその地域の

特徴がある粘土棺墓、有九者の墓とされる周溝墓が発見され、別な施設の建替現場では、円墳（古墳）が、これまでわかっていた大きさをはるかに超えるものであったことが明らかとなるなど、新たにわかった事実もあります。

文化財は、地域ごとに形



カット：上野 豊

状が異なるなどの特色があり、地域のアイデンティティの基盤となります。また、城下町における伝統工芸など文化資源が地域産業にもつながっていることがあります。埋蔵文化財からは、その地域の成り立ちや歴史上その場所であったことを知ることができます。地域の歴史文化を語る証人でもある文化財を自分で実際に見て、知るとは、時には当時の人々の想いまで想像させてくれます。また、自分の地域の歴史文化を新たに知るとは、驚きや感動を生み、地域に対する誇りや郷土愛につながると感じられます。

さらに、大きな災害を経

験した熊本では、身近な文化財の復旧が心の復興につながり、また、地域の人々の心をつなぎとめたり、全国の方からの応援の対象という役割も果たしています。

「熊本は大きな地震が少ない」と思っていました。古文書や遺構などから、歴史的に、幾度となく災害に見舞われていることがわかりました。しかし、それぞれの時代の先人たちは、そのたびにそれを乗り越え、故郷の宝を現在に残してきてくれています。我々も、これ乗り越え、子どもたちに、未来に、継承していかねばならないと感じています。熊本の歴史、文化を理解するうえで欠くことのできないもの、自分の住んでいる街や故郷に誇りを感じるもの、このような大切な文化財を継承し活用していくことで、将来の熊本の文化向上や地域発展につながる事ができればと思っています。

「むかし、むかし、こん
木原山にゃ鬼の住んどった
げな」という懐かしい祖
父の語りを思い出す。

ふる里富合の木原山を舞
台にした「鎮西八郎為朝と
鬼の話」や「加藤清正公と
藤井六弥太の話」は、我が
家のすぐ側に架かる橋に纏
わる話だけに特に興味惹か
れた。

外遊びから帰ると、祖父
のあぐらの中にスッポリは
まり込んで「じいちゃん、
なんか話してはいよ」とね
だる。「じいちゃんな歯の
二本無かけん、歯なし、は
なしゃこっでしみやあ」な
どと、はぐらかした挙句に
「そんなら語ろうかな」と、
語り始めてくれる時の嬉し
さ、満足感は今も忘れない。
誰もが孫にふる里の民話、
伝説を語れた訳ではなく、
それを身近に聞いたのはと
ても幸せだった事に気付い
たのは、ずっと後になって
からの事で、これが私の
「語り」の原点だ。アナウ

ンス学校や劇団「石」に入っ
たのも、その時は意識しな
かったが「語り」に向かっ
ていたのだ。

子供の成長とともに「語
り」も形を変え、我が子だ
けでなく社宅全体の子供達
へ、次に学校の放課後、そ
して「語り」を知らない大
人達へホールでの公演と範
囲を広げていった。第一回
は二十年前、大人のための

ドラマを「語る」

FM791で「ボイスステ
ーション」「おはなしの森」
民話」「森の都歴史ウオー
ク」等の番組で毎日、企画
選曲おしゃべりする傍らメ
ルパルクホール等で公演し
たが、この頃までは、絵本
や童話がテーマだった。
やがて、舞台で公演する
にはもっと実力を磨きたい
という思いが頭をもたげて
来た。

「スクランブルコンサート」
と題して、絵本をテーマに
「語り」「生演奏」「パネ
ルシアター」のコラボを上演
したところ、総合女性セン
ター多目的ホールに超満員
のお客様、嬉しい悲鳴を上
げた。
「こんな企画を待ってい
た」という声に励まされ、

そこで「熊本
市人づくり基金」
の助成を戴き演
劇と朗読、講談
を学びに月一回
一週間泊り込み
で、一年間東京

に通り続けた。講談は神田
紅師匠直に教えを受け、十
年めになる。メリハリ突っ
込み、七五調のリズム、節
回し、パンパンと張り扇の
音も小気味良く、ストレス
発散にもなるかと思えば、
世話物、怪談物は粋にも、
おどろおどろしくも語ると
いう多面性がある本当に
面白い。語りも歴史も両方
楽しめる。古典講談には難

しい決まりがあるが、創作
講談は次々と新しい話が生
まれ、時代に合わせた語り
になっている。まさに肥後
の歴史物語を語るにピッタ
リだと言える。「語り」は
演劇と朗読の間だと思ふ。
それぞれ手法は違っても
楽しんでもらえる語り”
を指すには、ひとつの手
法に限定するより、多方面
の手法を学ばねばならない
と思った。



カット・上野 豊

本の上野の人物を描く物
語と民話の二本柱で、民話
は熊本弁、歴史話は標準語
で語り続け、来年七月で十
周年を迎える。ホールばか
りでなく、いろんな場所で、
数えきれないほど語り、自
作が二百を超えた。私の大
事な宝物だ。

「自分の町にこぎゃん話
んあるてにゃ知らんだった」
「本当に楽しかった！」こ
んな声を聞く度に、やりが
いと幸せを感じる。

最近何より嬉しいのは、
地元小学校「おはなしクラ
ブ」で民話語りを教えてい
るが、その中の三人が、立
派にステージで語れた事。

「熊本の民話を熊本弁で
語って行きたい」と言っ
てくれる。この子たちにとっ
て民話は古くない、新しい
のだ。九月二十九日は白川
教会での「隠れキリシタン
断」十二月二日は玄宅寺で
「冬語り」、そして、来年九
月八日の「語り座」十周年
記念公演に向けて、新しい
気持ちで「語り」続けよう。

エッセイ 寿咲亜似
（演劇「語り座」代表）